

ハディース入門(3) - サヒーフ

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程 大木博文

はじめに

ハディースにはいくつかの分類方法がある。同一世代における伝達に携わった者の数の多寡によって分類することができれば、一方で伝承経路をどこまで遡ることができるかによって分類することもできるが、その信憑性に注目した場合には次の二つのうちのいずれかに分類されることになる。

(1) **マクブール**：マクブールとは「受け入れられるもの」という意味である。受け入れられるハディースは、さらにサヒーフとハサンに分けられる。そして、そのそれぞれが「それ自体によるサヒーフとハサン」、「それ以外によるサヒーフとハサン」に分けられる。

(2) **マルドゥードゥ**：マルドゥードゥとは「受け入れられないもの」という意味である。伝承者の中に信頼性に問題のある者が一人でも含まれている場合、そのハディースはマルドゥードゥと呼ばれ、原則的にそれを法的判断の根拠としたり、あるいはそれに基づいて行動を律することは禁じられる。しかしその中には、ある条件を満たしていれば受け入れられるとされるものもある。マルドゥードゥに分類されるハディースはサヒーフ、ハサンに対してダイーフと呼ばれる。

今回は、これらのうちの「サヒーフ」について考察する。

サヒーフの定義

アラビア語でサヒーフといった場合、通常は形容詞的に用いられて人間の体の状態を指して「健康な」という意味を表す。ハディース学においては比喩的に用いられ「信憑性に何ら疑義を差し挟む余地を持たないハディース」を意味する。つまり、以下に示す条件をすべて満たしているハディースがサヒーフとみなされる。

① **伝承経路の連続性**：伝承経路を構成する伝承者の一人ひとりが前者から直接伝聞し、後者に直接伝達していることが確認できること。例えば伝承者Aが伝承者Bに伝えているという場合に、両者の没年の開きが100年以上あったり、Aの没年がBの生年よりも前であったり、または両者がある一定の時期に同じ場所にいたという確認がとれないのであれば、そうした伝承経路を持つハディースをサヒーフと認めることはできない。

② **伝承者のアダーラ(公正)性**：アダーラとは一般に「公正」とよく訳されているアラビア語であるが、イスラームの文脈においては「正しい心と理性を持った敬虔な成人ムスリムで、自分自身でイスラームの教えに基づいた正しい判断を下すことができ、批判されるような行動や経歴を一切持たず、人間性を疑われるような不誠実な行為が一切認められない者のみが有する特質」を指して用いられる。

③ **伝承者の厳格性**：ここでいう「厳格」とは「分別を有する」という意味に近く、イスラームの信仰についても、また同時にハディースの筆記や伝達に際しても、どんな些細な過ちをも犯さないように細心の注意を払い、分別を持って厳格な対応をしている者を指す。

④ **伝承者の信頼性**：信頼できると認定された伝承者が伝えるハディースと異なる内容を含むものを伝えている伝承者が関与しているハディースは、サヒーフとは認められない。

⑤ **隠れた欠陥も含んでいないこと**：表面的には問題なしとみなされるような伝承経路であっても、仔細に検討してみると信憑性に疑義が持たれるような欠陥が隠匿されているということがある場合そのハディースはサヒーフとならない。

あるハディースがサヒーフであるか否かに関連して、ハディース集やハディース解釈学のテキストの中で、「これはサヒーフなハディースである」というハディース学者たちの判断を目にすることがしばしばある。この発言は、そのハディースがサヒーフとみなされるために必要な上記5つの条件を完全に満たしているということである。一方「これはサヒーフでないハディースである」という場合には、上記5条件のすべて、あるいはその中のいくつかを満たしていないことを意味していることになる。

サヒーフであるか否かという判断は、純粋にそのハディースを伝えた伝承者によって構成される伝承経路の連続性と信憑性、各伝承者の人物評定等に基づいて下されるものであり、伝承経路の数による判断とは全く異なるものである。従って、サヒーフであるためには最低何人のムスリムが何人のムスリムに伝達していなければならない、というような条件は原則的にはない。実際に『サヒーフ集』と呼ばれるハディース集の中にも、伝承者が単独で伝えているハディースがいくつか収録されている。しかし、多くのハディース学者は相当数の伝承者世代から同等に相当数の次の伝承者世代に伝えられているということ、サヒーフとみなす条件の一つとして挙げている。

最も信憑性の高い伝承経路

上記諸条件のすべてを満たして、信憑性に何ら問題がないと認められたハディースはすべて一律にサヒーフと呼ばれる。ところがそうしたサヒーフの中でも、どの伝承経路がより信憑性が高いのか、あるいはどういふ伝承経路が最も信憑性が高いものと言えるのか、についてはハディース学者たちの間で長く激しい論争が展開されたが、すべてのハディース学者が一致して認める結論には至らなかった。こうしたサヒーフの序列については、現在に至るまで、個々の学者の判断に委ねられている。一般的にサヒーフとみなされる伝承経路の中でも特にその信憑性が高いと広くみなされているものは、以下の通りである。

① **イブン・シハーブ・アズフリーがサーリム、その父と遡って伝えたサヒーフで、アブバクル・イブン・アビーシャイバが収録したもの。**

サーリムとはスンニー派正統第2代カリフ・ウマル・イブン・ハッターブの孫で、その父はアブドッラーである。

② **アハマド・イブン・ハンバルが、アッシャーフィイー、マーリク・イブン・アナス、ナーフィウ、アブドッラー・イブン・ウマルと遡って伝えたサヒーフで、アルブハーリーが収録したもの。**

③ **イブン・シハーブ・アズフリーがザイナル・アービディーン、その父、その祖父と遡って伝えたサヒーフ。ザイナル・アービディーンの子であるシヤア派第3代イマームのアルフサインの父親はスンニー派正統第4代カリフで、シヤア派では初代イマームのアリー・イブン・アビーターリブである。**

④ **アルアアマシュがイブラーヒーム・アンナハイー、アルカマ、アブドッラー・イブン・マスワードと遡って伝えたサヒーフで、イブン・マイーンが収録したもの。**

サヒーフの編纂

預言者ムハンマドの存命中、ハディースの記録は広く普及してはなかった。預言者の没後1世紀以上を経てハディースの公式編纂の時代に入った。当初ハディースはイスラーム法解釈・判断の基礎資料とみなされ、広範なイスラーム法のテーマを包括するために様々な内容のハディースが収録されたが、ハディースの質についてはそれほど強い関心が持たれなかった。

ハディースの信憑性を重視して編纂されたハディース集は、ヒジュラ

暦3世紀（西暦817-913年）の後半になってようやく現れるようになった。その先駆けとなったのがアルブハーリーとムスリムの二大『サヒーフ集』で、一般にはこの両書に収録されているハディースはすべてサヒーフであると言われている。次いで多くの学者の手によってサヒーフを含む様々なハディース集が編纂されるようになった。アブー・ダーウードは法判断の演繹を意図して『スンナ集』を著した。各章の配列は法解釈学書のそれに従っており、法判断の根拠となりうるハディースのみを厳選して各章に1つないし2つずつ配置するに留めた。従ってハディースの選択に際しては、サヒーフを含んではいるもののサヒーフにこだわることはなく、各章に該当する最も信憑性の高いハディースを選定している。编者自身が論証に必要と判断すれば、ダイーフも迷わずに収録している。アッティルミズイーの『スンナ集』は非常に内容が広範で、全てのハディースについて学者達の見解や、そのハディースに基づく学者達の行い、またサヒーフ、ハサン、ダイーフという評価、また伝承者と伝承経路と伝承経路の欠点、複数の伝承経路を有するハディースについてはそれらの経路の指摘、各章に関連する別のハディースの指摘等を行っている。アンナサーイーには『大スンナ集』（正式名称は『スンナ集』）と『スンナ集』（正式名称は『精選集』または『小スンナ集』）という2つの有名なハディース集があるが、特に断ることなくアンナサーイーの『スンナ集』と言った場合は『精選集』（『小スンナ集』）の方を指す。『大スンナ集』には若干の欠陥ハディースが含まれているが、『大スンナ集』の要約書である『精選集』に収録されたハディースは、全てがサヒーフである。イブン・マージャの『スンナ集』はサヒーフ、ハサン、ダイーフのハディースを含み、さらに少数ではあるが改竄されたハディースも含む。イブン・フザイマの『サヒーフ集』は正式には「預言者についてのムスナド・サヒーフ集の要約の要約」といい、アルブハーリーとムスリムの採択条件に沿って収集したサヒーフの中でも、特に厳選に厳選を重ねた結果残されたもののみが収録されている。イブン・ヒッバーンの『サヒーフ集』は编者自らによって「伝承経路に何らの断絶も認められず、伝承者に何らの欠陥も認められない様々な分野の様々な種類のサヒーフ・ムスナド集」と名付けられている。その最大の特徴は、サヒーフを命令事項、禁止事項、知っておかなければならない必須事項、放任意事項、預言者ムハンマドの行動規範の5範疇に分類していることであろう。

『サヒーフ集』に依拠したハディース集

① **ムスタドゥラク（増補）**：ムスタドゥラクとは、本来の意味は「修正されたもの」であるが、ハディース学の専門用語では古典的なハディース集に基づき、ある特定の方法で再編纂された新形式のハディース集の一つで「あるハディース集を選んでその編著者のハディース収集・編集条件を踏襲しつつ、独自で収集したハディースを編集したもの」を指す。ムスタドゥラク編纂の背景として、「自らが暗記したサヒーフの多くを『サヒーフ集』に収録しなかった」というアルブハーリーの述懐を指摘することができる。アルブハーリーとムスリムの両『サヒーフ集』に収録されなかったサヒーフを両者の『サヒーフ集』編纂条件に従って独自に編集したアルハキムの『二大正伝集に基づくムスタドゥラク』がよく知られているが、そこに収録されたハディースの伝承経路の中には信憑性に疑義が持たれているものも含まれている。

② **ムスタフラジュ（外伝）**：ムスタフラジュとは、本来の意味は「取り出されたもの」であるが、ハディース学の専門用語では「あるハディース集を選んでそこに収録されたハディースに、自らが収集した伝承経路のうちで底本としたハディース集には収録されていないものを添えて再編集したもので、自らに直接ハディースを口伝した者、またはその者にハディースを伝授した者の世代まで独自の伝承経路が底本に収録された伝承経路とは異なっているもの」を指す。従って底本となったハディース集に収録されたハディースとムスタフラジュに収録された同一のハディースとは伝承経路が異なる上に、ハディース本文の表現にも移動が見られる。両者の伝承経路において共通する伝承者は、そのハディースを預言者ムハンマドから直接見聞したサハーバ以外には、編著者の一、二世代前の伝承者しかいないことになる。ムスタフラジュからハディースを引用する場合には、それが例えばアルブハーリーの『サヒーフ集』に依拠するムスタフラジュだからといって、「アルブハーリーが伝えたハディース」と言うてはならない。

ムスタフラジュを参照する利点は数多いが、そのうちの主なものは以下の3点である。

(1) 通常はムスタフラジュに収録された伝承経路のほうが、底本に収録された伝承経路よりも長く、かつ詳細である。つまりムスタフラジュの伝承経路の方が、信憑性が高いと言える。

(2) ハディース本文の表現の異同から推察することによって、底本に収録されたハディースのサヒーフ性をさらに強めることができる。

(3) 信憑性の高いハディースが多くの伝承経路によって支えられているということは、その信憑性をより一層高める根拠となる。底本には収録されていない伝承経路によって、法的判断に際してより強力な論拠とすることも可能になる。

サヒーフの序列

後世において著されたイスラーム関連の著作において引用されるハディースの出典を明記するに際して、「両者の条件」（シャルトゥッ・シャイハイン）とか「一致」（ムッタファクン・アライヒ）という略記がよく用いられる。前者は「アルブハーリーとムスリムの選定基準に合致し、両『サヒーフ集』またはそのいずれか一方に収録された伝承経路によって伝えられたハディース」という意味であり、後者は「アルブハーリーとムスリムが一致してそのサヒーフ性を認め、それぞれの『サヒーフ集』に収録しているハディース」という意味で使われている。イブンヌッ・サッラフによれば「一致」という表現そのものには、イスラーム共同体全体が一致してそのハディースの権威を認めているという意味はない。しかしアルブハーリーとムスリムが一致してそのサヒーフ性を認めているハディースについては、その権威を認めることに疑いの余地はない。

『サヒーフ集』に収録された疑わしいハディース

アルブハーリーの『サヒーフ集』に収録されているがその信憑性に疑義が持たれているハディースとしては、「姦淫の伝承」として知られる次のものがよく引き合いに出される。：

「やがて、わたしの民のうちから姦通と絹と酒と楽器をハラール（合法）とする者が現れるであろう。また他の者達は山の麓に野営し、夕べに群を集める貧しい羊飼いに『今日はだめだ。明日来なさい』と言って追払うであろう。これに対してアッラーは山を崩して夜のうちに彼らの或る者を滅ぼし、他の者を復活の日まで猿と豚に変えるであろう」（牧野信也訳）

このハディースの伝承経路では、アルブハーリーに直接このハディースを伝えたとされるヒシャーム・イブン・アンマールとアルブハーリーとの間の伝達の実事が確認できないということが問題視されている。通常アルブハーリーがハディースの伝承経路を収録する際には、「某が私たちに話してくれた」という表現を用いる。特に彼自身に近い世代の伝承者の間の伝達を記述する場合には、こうした表現を重視して用いている。ところがこのハディースに関しては、アルブハーリーは「ヒシャーム・イブン・アンマールが言った」という表現を用いていて、アルブハーリーに語ったのか、あるいはそれ以外の誰かに語ったのかを明確にしていない。さらにヒシャーム・イブン・アンマールはこのハディースをサダカ・イブン・ハーリドという者から伝え聞いたとしているが、両者の間に接触があったという事実をアルブハーリーが確認した、という確証はない。従ってこの伝承経路の信憑性確認は、アルブハーリーに至る2人手前のところで途絶えてしまっているということになる。

アルブハーリーもムスリムも、サヒーフ以外はその『サヒーフ集』の中に収録しなかったと明言している。通常アルブハーリーとムスリムの『サヒーフ集』の中に見出される疑わしいハディースについては、以下のような判断がなされている。

(1) あるハディースの伝達が「言った」、「命じた」、「述べた」というような動詞の能動態を用いて示されている場合には、そうした表現ゆえにそのサヒーフ性に疑義をはさむ余地はない。

(2) あるハディースの伝達が「(以下のことが)言われた」、「伝えられた」、「述べられた」というような動詞の受動態を用いて示されている場合は、そうした表現からではそのサヒーフ性を確認することはできないが、『サヒーフ集』と呼ばれるハディース集に収録されているという事実に基づいてそれをサヒーフとみなすことにする。

「それ以外によってサヒーフとみなされるハディース」

ここまで述べてきたサヒーフは、厳密に言うと「サヒーフ・リザーティヒ（それ自体によってサヒーフとみなされるハディース）」と呼ばれるもので、サヒーフとみなされる要因がそれ自体の伝承経路、または本文の中に見出されるものを指していた。それとは別に「サヒーフ・リガイリヒ（それ以外によってサヒーフとみなされるハディース）」と呼ばれるものもある。「サヒーフ・リガイリヒ」とは、それ自体ではハサンであって、サヒーフよりも信憑性のランクが一段下がるが、別に同様の、あるいはより信憑性の高い伝承経路が複数存在することによりサヒーフとみなされるハディースのことで、言うなればサヒーフとハサンの間位置するものである。

アズハル大学卒業生第一回世界大会に参加して

イスラーム研究センター・シャリーア専門委員会委員長 武藤 英 臣

2006年4月11日・12日の二日間、アズハル大学卒業生第一回世界大会がカイロで開催された。

アズハル大学は、西暦972年カイロに建設されたアズハル・モスクに由来するイスラーム教育の総本山であり、現在4万人の学生を毎年社会に送り出すマンモス総合大学である。とはいえ、イスラーム学の総本山としてのアズハルの真骨頂は、千年の歴史を継承する「ウスール・ディーン（イスラーム神学）」部、「ロガト・アラビヤ（アラビア語学）」部、「シャリーア（イスラーム法学）」部の三学部である。これら三学部出身者を、アズハリイ（アズハル出身者）と敬意をこめて表現する。現在のような学部四年制は近代になってからであるが、それまでは、アズハル・モスク内で教師を囲んでの講義であり、現在もそれは続けられている。アズハル首脳によれば、アズハル卒業生は、世界118ヶ国に居住している。今回、アズハルはそれら卒業生のうち231名に招待状を送り、80ヶ国160名から参加連絡を受けた。国内からの出席も含め今大会の参加者を300名程度とした、とのことであった。

アズハルへの日本人留学生は戦前戦後を通じ25名余になる。いわゆるアズハリイは四名である。1969年アラビア語学部歴史科卒の飯森嘉助拓大名誉教授、1971年イスラーム法学部卒の武藤英臣拓殖大学イスラーム研究センター客員教授、1976年イスラーム法学部卒の徳増公明（宗）日本ムスリム協会会長、そして1983年イスラーム神学部卒の小杉泰京都大学大学院教授である。今回の大会開催通知は、在日エジプト大使館経由であり、飯森教授と小杉教授は出席を辞退し、徳増氏と武藤が参加することとなった。在日エジプト大使が直々にエジプトまでの航空券を我々に手交し、帰国後の報告を楽しみにしていると激励してくれた。

4月8日午後10時半、カイロ空港では、大学の広報部職員ハーリド君が出迎えてくれた。アズハル当局は、大会期間の二泊三日のホテル代食事を負担するので、8日カイロ入りした我々は、二泊するホテルを探さなければならない。大学周辺のホテルを巡り、結局ソネスタ・ホテルに到着した。後で同窓生から聞いた話では、このホテルはユダヤ系ホテルで、アラブ・ムスリムは利用しない、とのこと。どおりで、同窓生達の誰も泊まっていなかった。他のグループは、少し離れた別のホテルに泊まっていた。部屋に入ってシャワーを浴びたのは9日の午前3時であった。

4月10日（月）、今日は預言者生誕日（マウリドンナビー）でエジプト国内は祝日公休日。徳増氏と私は朝から大会会場ホテルへ移動のため、ソネスタ・ホテルをチェックアウトし、ロビーで待機する。今回のアズハル行きに同行した徳増夫人は早朝から友人とアレキサンドリアへ出掛け、春のエジプトを満喫している。11時ホテル前にアズハル大学専用と大書した大型バスが来る。荷物を積み込んで、バスは動き出した。我々の泊まったホテルの一本北側の通りにある「ホテル・ディーワーン」の前で止まった。

中国人三人が勢い良くバスに乗り込んできた。「アッサラーム・アレイクム」、「ワアレイクムッサラーム」と挨拶を交わし、彼等は大型バスの後方座席へ陣取った。暫らくして、我々の大型バスの前に中型の黒いセダンが止まった。乗客は誰も居ない。その車両番号は「外交官車輛xxx」とある。すると後方に座っていた中国人たちがどやどやと降りていく。我々が窓から見てみると、年齢60歳ほどで、頭に白いタキーヤ帽子を付けている小柄な中国人、と黒っぽい背広を着た40代の男の二人がホテル玄関から出てきた。セダンに向かって歩いてくる。その二人を護衛するかのように、バスから降りた中国人ムスリムたちが左右と後ろから従っている。二人がセダンに乗り込むとき口々に何か言い、更に彼等と握手している。先ほどの中国人たちがまたバスに戻ってきたので、誰？と聞いたところ、我々のリーダーだ、とのことであった。（後ほど大会会場で受取った名刺には「中国イスラーム教協会副会長ムハン

マド・サイエド馬雲福」とあった）

ホテルから知った顔の仲間が現れた。アラブ人、アフリカ人、インドネシア人たちがぞろぞろ出てきて、バスに乗り込みだした。バスは満席になった。ホテルのボーイがバスの後方ドアを開いて皆の荷物を積み込み、大型バスは動き出した。

大会会場のホテルは、エジプト国内でも最高級ホテルの一つであった。普通のエジプト人にいわせれば「一度是非見てみたい夢のようなホテル」とのこと。大カイロの外側にある。カイロ市中心から真東に18キロほど行った、スエズ通りに近い、砂漠の真ん中に突然出現した森と湖の中に立てられた豪華なリゾートホテルである。この森と湖は人工的に作られたもので、この一帯をミラージュ・シティー（砂漠の中の蜃気楼市）と呼ぶ。安い部屋でも一泊200米ドルするとか。日本人向けに畳の部屋まである。人工湖や池による海水浴施設、芝生を綺麗に生やした18ホールのゴルフコースを持つ、エジプト人ならずとも一度は見てみたい砂漠の中の蜃気楼の世界であった。

アズハル卒業生第一回世界大会 4月11日（火）

正面雑壇に四名が並んだ開会式は午前9時半から始まった。雑壇には、左側から、エジプト政府代表ワクフ省ザカズーク大臣、次いで卒業生総代、アズハル大学イスラーム法学部を1964年卒業のマルディブ共和国マアムーン大統領、次いで、シェイク・ル・アズハルのタンターウィ師、一番右側がアズハル大学学長タイエブ師である。

クルアーン朗読で開式となり、タイエブ学長の開会挨拶、次いで、ザカズーク・ワクフ大臣挨拶、次いでマルディブのマアムーン大統領挨拶、最後にタンターウィ・アズハル総長挨拶で開会式は終了した。

開会式後、直ちにセッション（パネルディスカッション）が始まった。二日間のセッションは、全体会議で行われた。従って、壇上に議長を含め4名、多いときにはセッション中に交替し9名のパネラーが座ることもあった。パネラーは、20分程度喋り、

全員が喋り終わったあと、各セッション20分程度のQ&Aが設けられた。

二日間で6セッションあり、33名のパネラーが喋った。6セッションのテーマはそれぞれ①【1000年の各時代におけるアズハル】、②【アズハル、現代諸問題への対応】、③【アズハルと地域組織や国際機関】、④【アズハル、将来に向けて】、⑤【アズハルの使命と現代社会の諸問題】、⑥【アズハルその一貫性、先人と後進その現状と将来】であった。

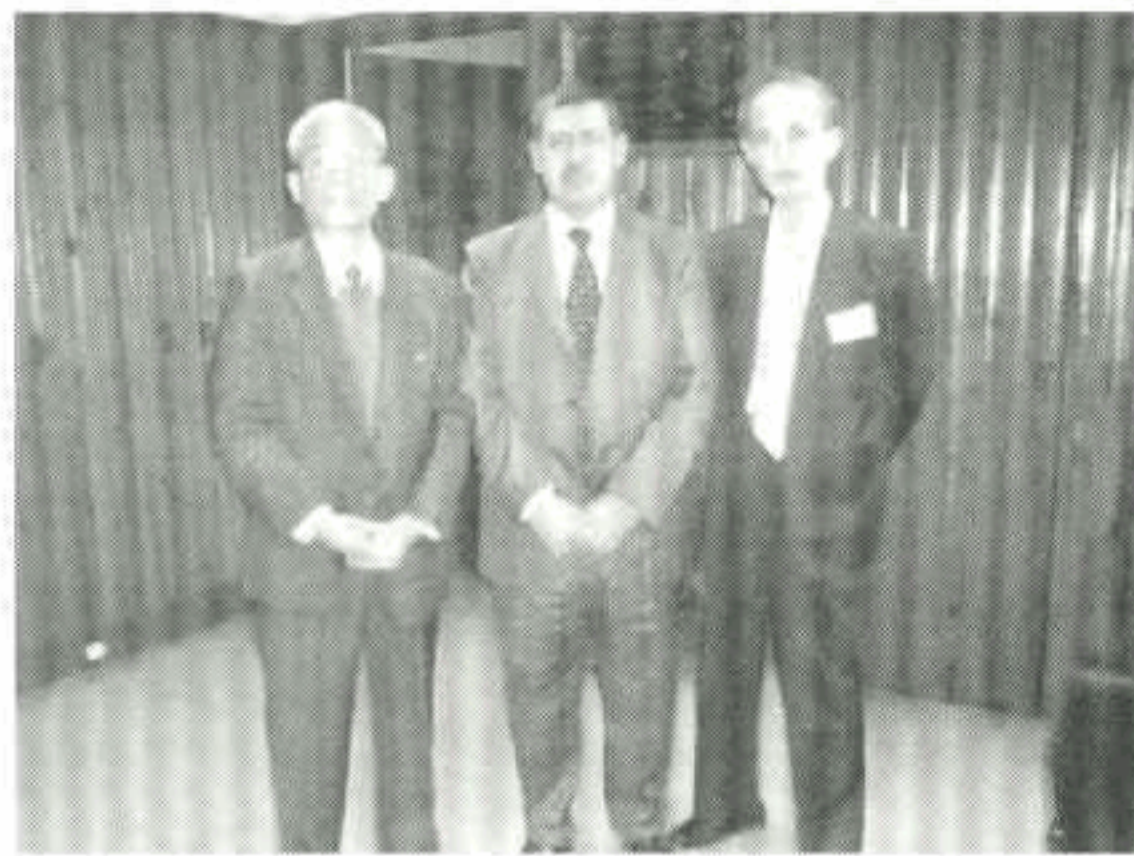
プログラムは10日に配布されたが、実際の進行と登場パネラーが少し違っていた。一時混乱をきたしたが二日目から、演壇脇に、パソコン画面でそのセッション議長名とセッション参加者名とテーマを掲示するようになった。

飛入りのパネラーには、サウディアラビアの元石油相ザキ・ヤマニ氏がいた。我々がその顔を区別つかない人が登壇したときは困った。ヤマニ氏は、開口一番「まったく突然の指名で吃驚しているが、このようなチャンスを与えられ大変光栄だ…」と喋り出し、学生時代の勉強について、自国マッカでの勉強とアズハルでの体験を比較しながら話した。

セッション開始前に各パネラーのスピーチ草稿は印刷され、会場で配布されるのが普通であるが、今回は、招待パネラーの草稿は印刷物で配布されることが殆ど無かった。

4月12日（水）

第6セッション終了と同時に閉会式となり、アズハル大学卒業生第一回世界大会宣言文（トウシーヤ）がタイエブ学長によって読上げられた。学長が同宣言文を読上げ、会場の承認を諮ったところ、会場から修正、加筆提案がなされた。従って、その場では宣言文の最終版は採択されず、加筆、修正されたものを今大会の宣言文とすることを満場一致で採択した。最終的な宣言文（トウシーヤ）は我々が帰国した後、4月19



アズハル学長 Dr.Ahmad Al-Tayyebとともに

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究センター
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: <http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp/>

拓殖大学 イスラーム研究センター ニュースレター

平成18年6月15日発行
発行人 拓殖大学イスラーム研究センター
編集人 イスラーム研究センター主任研究員
柏原 良英

日にタイエブ学長からファックスで送られてきた。

以下4月19日ファックスで送付のあった宣言文の概要：
2006年4月11日-12日開催のアズハル大学卒業生第一回世界大会宣言文：

- 1) カイロに本部を置く「アズハル卒業生世界連盟(Arrabitato Al-Aalamiyato Li-Kharriiji Al-Azhar)」の創設を勧告する。更に準備委員会を設置する。
- 2) 準備委員会は「連盟」の骨格を準備し、設立に関わる必要手続きを遂行し、またアズハル卒業生が居住する各国に支部開設の方策を検討する。
- 3) アズハル大学に「卒業生事務所」を開設し、卒業生名簿の作成、卒業生ネットワークの準備、同ネットワークを通じ相互に必要なとする情報の交換、ムスリム世界の諸問題、重要事案への統一見解作成に寄与する。
- 4) アズハル大学卒業生世界大会を定期的で開催する。
- 5) ムスリム少数派各地でアズハル教育普及に必要な手段と方策の検討。
- 6) 「連盟」に寄せられる、諸地域の問題や懸案事案に対する処理、対応方策、解決策を世界共通言語や地域共通言語を使い季刊で発行する。各地域のムスリムの積極的参画を求める。
- 7) 「連盟」は地域間の相互交流を促進し、ムスリム間で見解の相違がないよう努力する。



アズハルムスク内講義風景

- 8) アズハル卒業生は、それぞれの知的業績、活動、出版物、その他を文書、書籍或いはインターネット等の手段でアズハル本部に報告する。
- 9) 「連盟」はアズハル卒業生の成功例や褒賞例その他、人の手本となるケースを世界に発信する。
- 10) 大会は、これまでのアズハルの教育を高く評価する。
- 11) 非イスラーム国においては、イスラームの基本を保持しつつ、当該国の憲法や法律、規制を遵守し、「連盟」の目的実現に尽力する。
- 12) デンマークの一部メディアの非礼な行為を非難する。
- 13) イラクにおけるあらゆる占領勢力の撤退を要求し、国内ムスリムの統一を呼びかけ、イラクの再建と発展を阻害するあらゆる勢力に反対する。
- 14) パレスチナ国民のため義捐金募集を開始する。
- 15) あらゆる宗教への侮辱を取締る犯罪法の制定を国連に要請するよう勧告する。

第1回世界ムスリム学者会議に参加して

イスラーム研究センター主任研究員 柏原 良英

サウジアラビアのマッカで世界のムスリム(イスラーム教徒)の学者を集めて開催された第1回目の会議に当センターから森センター長とムハンマド・ザキ研究員と筆者の3人が招待されて出席した。この会議はアブドゥッラー国王が主催し、マッカに本部を置くラービタ(世界イスラーム連盟)がその会議場を使って開催したものだ。会議には世界中のムスリム学者が200人集まり「ウンマ(イスラーム共同体)の連帯」というテーマを中心に発表と討議がなされた。会期は4月1日から4日までの4日間だったが、これが初めての会議とあって連日朝から夜までぎっしりと会議が開かれて、主催者側の意気込みが感じられた。それはまた現在イスラーム世界だけでなく世界各地で起きているイスラームに関する様々な問題に対してイスラーム側からも何とかしなければならないという危機感を窺わせるものでもある。そこで世界のイスラーム団体の統括を任じているラービタが出した結論として、本来イスラームの持っていたウンマとしての統一と連帯が失われてきていることにその根本的な原因を見出し、その回復を抜きには抜本的な解決にならないという強い考えからこの会議が開催されたわけである。

会議は大きく5つに分かれ、まず①イスラームの基本であるクルアーンとスンナ(預言者ムハンマドの言行)に立ち返りウンマの重要性と意義を確認することから始め、次に②歴史の中でウンマの果たした役割と③現在の直面する状況を理解する。次に④かつてあったウンマの連帯を妨害している内外の問題と原因を分析し、それに対する⑤解決策を具体的に提言するという流れの中で発表があり討議がなされた。会議の出席者がムスリムの学者であることを前面に出しているのはイスラーム社会の中での学者の果たす役割の大きさを考慮したものである。宗教だけでなく政治経済の専門家が会議で発言するのも現在のイスラームの抱える問題の多様さを示している。会議の中で提出された具体的な提言として興味深いものとして以下のようなものがあった。

- ①自由イスラーム経済ブロックを作り、イスラーム諸国間の経済を活性化を通して連帯を強める。
- ②ウンマの分裂は内部の意見統一がなされないことにあるとし、イスラーム学者間の意見の統一を図る努力をするために会議や交流を深める。
- ③EUのような連合を作り自分達の軍隊を持ち国連と協力し紛争を自らの力で解決する。
- ④統一の裁判制度を設け公正な裁判を行う。

これまでウンマの統一については何度も言われてきたことであるが、改めて各分野の学者が集まって具体的な方法まで討議することはあまり見られなかっただけに、これからこの会議がどのような動きを見せていくのか注目していきたい。

タフスィール(クルアーン解釈)研究会のお知らせ

当研究センターは今年度の新たな活動として、イスラームの原点であるクルアーンの理解を深めるためのタフスィール研究会を開催することにしました。今年度はクルアーンの中でも第1章と2章を4回に分けてそれぞれの研究者が発表するやり方で行います。日時については以下の通りです。

- 第1回 6月24日(土) 2時~4時
- 第2回 9月30日(土) 2時~4時
- 第3回 12月16日(土) 2時~4時
- 第4回 3月3日(土) 2時~4時